

台湾は中国じゃないことを知った！

## 台湾修学旅行で

### 李登輝先生の講演会を開く！

山形県立庄内農業高等学校教諭

五十嵐 真徳いかり まさのり



講演中の李元総統

## 初めての台湾修学旅行

今、私は修学旅行文集の編集作業に追われている。生徒が書いた拙い感想文の中には「台湾こそが日本のパートナー」、「日台の国交回復に協力したい」、「台湾とならお互いの短所を補える」といった文言も見られた。

出発直前まで「中国には行きたくない」、「テロが不安」など中華人民共和国との混同や誤認を持っていたことに鑑みれば、正しい認識を持つに至っただけでもこの修学旅行の意義があったと確信している。

本校修学旅行団百十二名は平成二十二年十一月二十四日から三泊四日の日程で、地元庄内空港から復興航空機を

チャーターし渡台した。初めての台湾修学旅行である。

折しも台湾国内は五大都市選挙終盤戦に突入しており、日本とは違う選挙活動に子供たちは軽いカルチャーショックを受けていた。

我々が李登輝元総統のご講演を拝聴する機会を得たのは十一月二十五日。投票票日二日前のことだった。

周知の通り閣下には、台湾元総統という顔以外に著名な農業経済学者としても知られている。我々は農学博士としての閣下から、日本人について語っていただきたく、演題を「日本産農産物の台湾における評価」として企画を提案し、快諾を得ていた。

しかしながら、ご講演前日の深夜ま

で弁公室と打合せを行い、閣下の日本の若者に期待する熱い思いと滾る情熱は、「日本の一青年から受取った手紙」、「台湾と日本・百年来の歴史及び今後の関係」と、より分かりやすい演題へと変更していった。

両者ともその内容は群策會のWebサイト (<http://advotw/>) の【李登輝官網】—【講演稿】—【李登輝的主要文章講演稿】に全文が日本語で掲載されているので、ここでは内容を割愛させていただきます(本誌4頁参照)。

## 子供たちの心を鷲掴みに

さて、講演会は台北市内の我々の宿舎である、豪景大酒店のレセプションホールを会場に行われた。隣のホールでは同時間帯に結婚披露宴が行われており、新郎新婦も招待客の方々も思わぬVIPの出現に真贋疑う面持ちで遠巻きに見ていた。

私は不安と緊張で卒倒寸前だった。不安材料はもちろん生徒である。授業



講演は冒頭から生徒たちを惹きつけ、質問には事例を交えて細やかに解説（平成22年11月25日、台北・豪景大酒店）

時間（五十分）よりも長い講演に耐えられるのか、居眠りせずに拝聴できるのか、私語は起きないか……。しかし、これも杞憂に終わった。本校校長の先導で閣下が入場されると、生徒たちは全員が起立して割れんばかりの拍手でお迎えしたのだ。彼らにも日本精神があったのだ。そしてその結果が上記の感想文である。

講演会はスタートから閣下の熱を帯びた口調が、子供たちの心を驚掴みに

した。教科書に書かれていない正史を語る閣下の講演内容は、在校生には少々難解ではあった。しかし、教育者でもある閣下は、時折砕けた口調で「これはちょっと難しかったかな?」、「今の子どもにはわからないかな?」と優しく語り掛け、さらには「はい、ここは大切! いいですか、しっかりと書いてくださいよ」とメモを取る生徒たちに板書事項を何度も繰り返し指示してくださった。これには我々は教員も苦笑いさせられる一幕であった。

講演会終了後、特別に質疑応答の時間を設けていただき、生徒たちが考えてきた日台の農業事情について質問させていただいた。その内容は、日本の農業政策、国際的に見た台湾の農業的優位性、農業の第六次産業化、地産地消についてなど多岐に富んでいた。正直、短い時間で解説していただくには難しい内容ではあったが、農学博士である閣下は生徒たちの質問に、事例を交えて細やかに解説してくださった。

## 台湾サポーターを育てていきたい

今回の台湾修学旅行と閣下のご講演の思い出は紙面では語り尽くせない。

学校生活の中でも、人生の中でも修学旅行はビッグイベントの一つだと思っている。教師としては生徒に少しでも楽しい思い出を残してやりたいと、台湾の代表的な観光施設見学から、花博見学、日本語学科の大学生との交流、国立苗栗高級農工職業学校の訪問・交流会など盛り沢山の企画で挑んだつもりである。

「台湾が好きになりました」、「また行きたいと思います」との声と共に「閣下の思いに応えたい」、「必ず日台の為になる研究者になって戻ります」などの声が上がリ、生徒たちが国境の南の友邦に思いを寄せる機会を与えてくれた日本李登輝友の会をはじめ、関係各位には感謝の念でいっぱいである。東北の地で、私は台湾サポーターをこれからも育てていきたい。